

博士学位請求論文 審査報告書

報告番号 甲 乙 第 号

氏名 金成 祐人 君

論文題目 前期ハイデガーにおける世界と自然の問題

論文審査担当者

主査	慶應義塾大学文学部教授 同文学研究科委員	荒畑 靖宏
副査	慶應義塾大学名誉教授	斎藤 慶典
副査	東京大学大学院人文社会系研究科教授	古荘 真敬
副査	慶應義塾大学文学部教授 同文学研究科委員	平井 靖史
学識確認	慶應義塾大学文学部教授 同文学研究科委員	荒畑 靖宏

【論文概要】

本論文は、ドイツの哲学者マルティン・ハイデガー（Martin Heidegger 1889–1976）の前期哲学における「世界」の概念を、やはり彼の前期哲学における「自然」概念との連関から解明し、その全体像と哲学的意義を明らかにすることを目指したものである。前期ハイデガー哲学を代表する有名な「世界内存在（In-der-Welt-sein）」という概念にも示されているように、「世界」概念が前後期をつうじてハイデガー哲学の中心に位置づけられていたことは疑いなく、また彼のいわゆる現象学的世界論は、ハイデガー以後の哲学への多大な影響にとどまらず、哲学外においても、たとえば看護学の分野や AI 研究の分野にまで影響を及ぼしていた。にもかかわらず、ハイデガー研究の内部においては、彼の世界概念の全体像と哲学的意義が完全に解明されたとは言いがたい。とくに、『存在と時間』直後の、いわゆる「メタ存在論（Metontologie）」が展開される時期に、「全体における存在者（Seiendes im Ganzen）」としての自然という新たな問題設定がハイデガーによって提示されたのだが、この自然概念が、『存在と時間』で提示されている自然概念とどのように異なるのか、またそもそも『存在と時間』で分析されている世界概念とどのようなかわりがあるのかが、ほとんど未解明であった。だが、世界概念を自然概念との対比において明らかにすることは、カント以来の

近代哲学の王道である。本論文はまさにその空所を埋めるべく、「全体における存在者」としての自然という概念の由来・内実・射程を明らかにすることをつうじて、この自然概念を含み込むものとして考えられた世界の概念、すなわち「全体における存在者としての存在者の開在性（Offenbarkeit des Seienden als solchen im Ganzen）」の解明を試みる。

本論文の構成は以下のとおりである。

序論

背景

課題

方法

第1章 『存在と時間』前の世界と自然

A. 『存在と時間』前の世界

1. 世界の世界化
2. 周囲世界・共同世界・自己世界

B. 『存在と時間』前の自然

1. アリストテレス解釈におけるピュシスの受容
2. アリストテレスに対する批判

第2章 『存在と時間』の世界と自然

A. 『存在と時間』の世界

1. 『存在と時間』におけるカントの世界概念に対する批判
2. 周囲世界と有意義性
3. 世界概念の二重性——「有意義性」と「無意義性」（「無」）

B. 『存在と時間』における自然

1. 世界内部的存在者としての自然
2. 『存在と時間』における第三の自然の問題

第3章 『存在と時間』後の自然概念

1. メタ存在論の問題設定とその由来
2. メタ存在論は領域的存在論か
3. 存在論の存在論的基礎
4. 「全体における存在者」とは何か
5. 根本気分という現象的基盤

第4章 『存在と時間』後の世界概念——「世界とは何か」という問いを展開する三つの道

1. 史学的考察の道
2. ハイデガーにおける超越の問題
3. 世界化について
4. 世界の実存的意義から実存論的意義へ
 - 4-1. 私たちの日常的な世界了解から世界概念を展開する道

4-2. 世界観

5. 三つのテーゼを比較考察する道——世界形成・世界企投から「全体における存在者としての存在者の開在性」へ

第5章 世界と自然の哲学の展開

1. 超越とは別の仕方——「全体における存在者」の隠れ
2. 世界と大地の抗争

第1章では、『存在と時間』より前の時期（本論文では「初期」と呼ばれる）の世界概念と自然概念が論じられる。ここではまず、ハイデガーが世界について論じる第一の動機が、「外的世界の實在問題」（意識の外側に世界が實在するのかという問題）が哲学的に喫緊の問題だとみなされることによって、われわれが日常的に生きている世界（「生世界（Lebenswelt）」）が隠蔽されてしまうという事態であったことが示される。そして、生世界を構成する三つの契機のひとつである「自己世界（Selbstwelt）」、これの「先鋭化」という事態が、生世界を隠蔽する理論的態度の「客観化」の働きを予防するとハイデガーは考えていたことが明らかとされる。他方、この時期の自然概念については、本論文はそれがアリストテレスのピュシス論の批判的継承であることを明らかにすると同時に、じつはこのアリストテレス解釈がメタ存在論期の自然論の原型となっていることをも示している。というのも、ハイデガーの解釈によれば、アリストテレスは、私たちが通常「自然」ということで考える「おのずから生成するもの」の基礎に、その根源として「おのずから恒常的にあるもの」を想定し、私たちはそれを「驚き（タウマゼイン）」という感情をつうじて「全体としての存在者」として観取すると考えていたからである。

第2章では、『存在と時間』における世界概念と自然概念が論じられる。この時期の両概念についてはすでに膨大な先行研究が存在するが、本章が着目するのは、この時期以降のハイデガーが自身の世界概念をとくにカントの世界概念の批判的吟味をつうじて彫琢していったその経緯である。これによって、ハイデガーの現象学的世界概念の哲学史的な意義が、いっそう明確になったと言える。他方で、ハイデガーの世界概念についてはつねづね、「有意義性（Bedeutsamkeit）」と「無意義性（Unbedeutsamkeit）」もしくは端的に「無（Nichts）」という矛盾した性格づけが与えられていることが問題点として指摘されてきた。この問題についても本章は、人間存在の生きる日常性と非日常性という対比から、整合的な解釈を提示している。最後に、本章が明らかとしたもっとも特筆すべき点は、初期の現象学的世界論において重要な役割を果たしていた「前世界的なもの」と「世界化」という論点と、アリストテレスのピュシス論解釈において明らかとされた「全体における存在者」としての自然が、もはや『存在と時間』には登場しないということである。つまり『存在と時間』に登場する自然は、人間が自身の生活のために資源やエネルギーとして利用したり、あるいは科学的探究の対象としたりする、あくまで世界の内部におさまる存在者（世界内部的存在者）としてしか扱われていないということである。この事実が意味するところを読み解くことが、本論

文の以降の課題となる。

第3章では、メタ存在論期の自然概念が論じられる。ハイデガーはとくにこの時期に、自然を「全体における存在者」として論じているのだが、そもそもこのメタ存在論という発想が、それ以前の、とくに『存在と時間』の哲学的プログラムとどう関係するのかということ自体が、ハイデガー解釈においてはいまだ解決をみない難題とされてきた。本章は、この問題についてこれまで提案されてきた有力な解釈（メタ存在論は領域的存在の一種である）をしりぞけ、問題の「全体としての存在者」というメタ存在論期の主題を、ハイデガーが初期から堅持してきたピュシス論と強く結びつけて読むことによって、『存在と時間』期までの世界概念では扱いきれない問題がこのメタ存在論期に取り組まれているのだという解釈を提示する。こうして本論文は、メタ存在論期に集中的に論じられた「全体としての存在者」が、『存在と時間』では姿を消していた「前世界的なもの」や（驚きのような）根本気分によってはじめて開示される「おのずから恒常的にあるもの」といった問題群が装いを新たに再登場したものであると解釈するのである。

つづく第4章は、メタ存在論期の世界概念をとりあげ、そこに「全体における存在者」という意味が組み込まれ、前期ハイデガーの世界概念がその最終決定版である「全体における存在者としての存在者の開在性」へといたる経緯を詳らかにし、またそれをつうじて、この世界概念が『存在と時間』のそれ（周囲世界（Umwelt）、有意義性）とどういう関係にあるのかを明らかにしようとする。そのために本章が依拠するのが、1929/30年冬学期講義「形而上学の根本諸概念」で多様な角度から考察された「世界とは何か」という問題である。この講義で展開されている、複雑で一見したところ関連性が不明瞭な複数のアーギュメントを、本章は正確な読解と大胆な解釈をおりまぜることで整合的に解釈しようとする。その結果明らかとなったのは、メタ存在論期に新たに登場した世界の規定は、『存在と時間』における世界概念を、その生成の観点から語り直したものにほかならないということ、したがって『存在と時間』期の世界分析とメタ存在論期のそれは、けっして背反的ではなく、むしろ相互補完的だということである。

最後の第5章では、課題として残された今後の研究のための青写真として、1930年以降のいわゆる中期以降の世界概念と自然概念がとりあげられ、前期ハイデガーにおける両概念との差異が明らかにされ、中期以降の世界論・自然論の展開の軌跡が示される。そこで指摘されたのは、中期以前には世界が論じられる際にならずとってよいほど言及されていた「超越（Transzendenz）」の問題（全体としての存在者は超越されるもの・乗り越えられるものとして規定されていた）が背景に退いてゆき、全体における存在者としての世界や自然が、もはや乗り越えられるものとして考えられなくなっていったという経緯、むしろ「全体における存在者」はその「隠れ（Verborgenheit）」が強調され、中期以降の世界論の中心的モチーフである「世界と大地の抗争」という不断の双方向的な運動のなかで捉えなおされているという事実である。この世界概念の変化の意味するところの解釈が課題として浮上したことは、もちろん本論文の成果のひとつである。

【審査要旨】

本論文の受理決定を受け、2025 年 4 月 8 日に公開審査会を開き、あわせて学識確認をおこなった。審査の要旨は以下のとおりである。

本論文の研究の背景は、前期ハイデガー哲学における世界概念の全体像が先行研究においては十分に明らかにされていないという事実にある。その最大の理由として本論文が挙げるのは、前期世界論の到達点である「全体における存在者としての存在者の開在性」における「全体における存在者」が、アリストテレスの「ピュシス」概念の継承であり、人間存在（これをハイデガーは *Dasein*、「現存在」と呼ぶ）が意味に満たされた世界に実存する以前の、多様な自然現象を内実とすることが十分に理解されていないことである。本論文はまさにその欠を補うことによって、前期ハイデガーの世界概念の全体像を浮き彫りにすると同時に、世界と自然の関係性についての考察が、最初期から『存在と時間』を経て中期以降にまで続く、ハイデガーの思索のひとつの重要な横糸であることを明らかにしている。この点に、本論文の最大の独創性と重要性があると言ってよい。

方法論的な観点からも、本研究は模範的な研究論文たりえている。たとえば序論では、膨大な数の先行研究のサーヴェイの結果明らかになった解釈上の不備を 14 点も列挙し、それらすべてを課題として設定し、そのひとつひとつを本論で解決していくというスタイルが採用される。この丹念な作業によって、ハイデガーの世界概念と自然概念は、それぞれがかつてないほどにクリアになるとともに、両者の関連性がこれまで想定されていた以上に深いものであることも明らかとなった。この点においても、本論文は十分以上の水準に達していると言える。

もっとも、そうした本論文にも、いくつかの問題点、未熟な点があることは否定できない。第 1 に、本論文の構想は、「全体における存在者」の概念が（世界概念の揺れと対比して）初期から一貫して同一の意味を保持していることを前提としてはじめて可能になるものだが、その点にはおおいに疑問の余地がある。というのも、おそらく「全体における存在者（*Seiendes im Ganzen*）」なる言葉は、なにか固定された明確な意味内容をもつ言葉ではなく、「現存在」や「気遣い（*Sorge*）」や「世界内存在（*In-der-Welt-sein*）」などの他の多くのハイデガー語同様、伝承による硬直した意味の混入をふせぐために空虚で形式的な表示しかない「形式的告示（*formale Anzeige*）」表現として、彼の解釈学的現象学において方法論的に使用されている言葉であることは明白だからである。したがってそれはむしろ「わたし」や「ここ」、「いま」などの指標的表現と同様に、使用者と使用の文脈によってその意味を変えることに眼目があるような表現なのである。第 2 に、これは何人かの審査員から共通して指摘された点であったが、本論文はハイデガーの世界概念の変化の軌跡を描き出すことに成功してはいるものの、そうした変化がハイデガーの思索の運動のどのような内的必然性によって引き起こされたのか、また引き起こされざるをえなかったのかについて、十分に考察できているとはいいがたい。たとえば、第 4 章の分析の成果として、メタ存在論期には「全体における存在者」が世界を一契機として含むようになったことが明らかとされたが、事柄

の必然としてどうしてそうならざるをえなかったのか、世界はそこで一契機としてどのような役割を果たすと考えられていたのか、こういったことが考察されないままなのである。これは畢竟、本論文の着眼点が、ハイデガーが自身の哲学の進展につれて次々と現れる諸問題にどう対処することで世界概念を変化させていったかということのみに置かれていて、ハイデガーの思索がどのような「思索の事柄 (Sache des Denkens)」に導かれていたのか、そしてどこに向かっていたのかの分析が不十分なためであろうと思われる。おそらく、文献的実証性の点できわめて精緻な本論文の研究成果も、こうした大きなストーリーの中に埋め込まれることによってはじめてその本来の哲学的意義を得たはずだと思われる。

しかしながら、以上の問題点は本研究がもつ本質的な価値を損なうものではけっしてない。むしろ、これらの問題点は、本研究のあえて踏み込んだ解釈によってはじめて明らかになったものであり、その意味で、こうした新たな解釈課題を開拓したこともまた、本研究の成果に数えられてしかるべきであろう。

以上を総合的に考慮し、審査員一同は、本論文が博士（哲学）の学位授与にふさわしいものであると判断する。

以上